

**「資源」としての民族誌的「情報」**  
**Ethnographic “Information” as “Resources”**  
**カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州先住民**  
**サーニッチの教育自治と「文化」復興**  
**The Cultural Revitalization and Educational**  
**Autonomy of the Saanich in B.C., Canada**

**渥美一弥**  
**ATSUMI Kazuya**

1969年にカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州の各地域の先住民集団の首長が結集し、“B.C. Union of Indian Chiefs”という組織を設立した。1972年秋には同組織の第3回年次総会がヴィクトリアで開かれた。その時、首長だけでなく各集団の長老たちも集まり、先住民の将来を話し合った。以下はそのときのある長老の言葉である。

21世紀に生き延びるためには、インディアンも白人の行動様式を身につけなければならない。ただ過去を嘆いているだけではだめだ。白人にも、多くの長所がある。彼らの創りだした産業技術は、我々も利用していかなければならない。我々は、インディアン文化と白人文化の調和点を見出すように努力しなければならない。現代の世界に立派なインディアンとして生きていくためには、インディアンの言葉と白人の言葉、インディアンの行動様式と白人の行動様式の双方を身につける必要がある。今までは、そうした努力をする必要がなかった。しかし、これからは、こうした努力なしには、インディアンは民族として生き延びられない。今までのインディアンの歴史は我々にそう告げている。

## はじめに

本稿はカナダ西部に居住する北米北西海岸先住民サーニッチにおける教育

自治と「文化」復興運動についての現状報告である。この運動は、ヨーロッパ人との接触以降奪われ続けてきた「文化」を取り戻すべく、新たな枠組みを創造しつつあるサーニッチの人々の諸活動と言える。この諸活動の基盤として長老たちが守ってきた言語や神話、地名などが存在する。本稿ではこの言語や神話、地名等を「資源」として捉えてみる。そうすると、サーニッチはその「資源」を称揚し、その「資源」を基に美術作品や言語復興を目的とした教育システムを作り上げているという見方が可能となるはずである。

そのために（所謂）「文化」と「資源」との関係をどのように捉えるかがあらためて問題となる。そこで本稿では、その関係をつなぐ概念として民族誌的「情報」という語を使用する。後述するように、1970年代までにカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州の先住民の言語や儀礼といった「伝統的生活様式」等は、日常生活のレベルにおいては、ほぼ壊滅状態に追いやられた。それに伴い各地域集団独自の認識の仕方や象徴の解釈にも変化が生じてきたことは明らかである。この状態の最も重要なファクターとなったのがいわゆる「同化教育」である。現在の先住民の生活を記述する場合、同化教育がそのプロセスでサーニッチの日常から「文化」を切断してしまったというポストコロニアル的状况は常に意識されていなければならない。

ここで人々を有機的に結び付けていた「文化」が失われた後の状況を記述するのに再度「文化」という語を使用することには問題がある。サーニッチの日常生活において「文化」を復興させていくという場合、その「文化」自体は現時点ですでに失われている。とすれば、過去の生活において人々の諸活動を有機的に結び付けていたものと現在の彼らの日常生活において復興されつつあるものと同じ「文化」という語で表してよいか再考の余地がある。というのもそれは結果的に同化教育が行った文化的ジェノサイドを覆い隠してしまうことになるからである。その同化教育が行った「文化」の壊滅状態から再び「文化」を復興させていくための力の源泉には、長老たちが守ってきた言語、神話、地名といった知識や博物館に残されたサーニッチの祖先の作品等がある。本稿ではそれらを民族誌的「情報」と呼ぶことにする。

その民族誌的「情報」を用いた「文化」復興のための諸活動の目的達成には州や国といった単位からの経済的な援助が重要な役割を持っている。そ

の背景にはユーロカナディアン（ヨーロッパ系カナダ人）が作った先住民に対する肯定的イメージのひとつである「深い精神性（spirituality）」がある。そのイメージも現在のサーニッチの経済活動においては重要な「資源」となっている。その一例として、本稿ではサーニッチの2人の芸術家を紹介する。そして民族誌的「情報」が個人レベルでの経済活動の「資源」として存在していることを明らかにし、この「資源」に対するドミナントな社会における認識の変化（「野蛮なもの」から「深い精神性を持つもの」という認識の変化）が先住民の経済活動に影響を及ぼしている状況について報告し、サーニッチで営まれている諸活動が目指しつつある方向について検討する。

## 1. サーニッチについて

ブリティッシュ・コロンビア州内の先住民（First Nations）についての一般的な合意によれば、First Nations とは18世紀末にヨーロッパ人やアメリカ人が同州に到達するよりも以前に同州に居住していた人々 [Muckle 1998: 2] である。First Nations の一集団としてのサーニッチの居住地は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州西端にあるバンクーバー島のサーニッチ半島にある。サーニッチ半島は、バンクーバー島南部の東側にあり、州都ヴィクトリアから北に約40キロのところにある。サーニッチ半島には4つの指定居留地があり、各指定居留地の人口は、およそ、① Tsartlip（ツァートルリップ）に750人、② Tsawout（ツァワウト）に630人、③ Pauguachin（パウガチン）に220人、④ Tseycum（ツァイカム）に150人で、合計約1750人である。さらに、1852年のダグラス条約によってサーニッチに含まれるマラハットの人々（実際には、サーニッチだけでなく、ラミヤカウチンの人々が移り住んでいる）やガルフ諸島やサンホワン諸島に住む人々を含めると、約2250人がサーニッチという自称を用いている（2008年）。サーニッチの言語、「センチョッセン」はコースト・セイリッシュ系ノーザン・ストレイツと分類されている言語の一つであり、サーニッチはノーザン・ストレイツの言語を話す「集団」の中で、最も西に居住している。

ヴィクトリアというカナダとしては比較的高人口の都市近郊にその指定居

留地があるため、サーニッチにはユーロカナディアンとの通婚も多く見られ、現在では「伝統的」出自を意識するサーニッチはまれである。ヨーロッパ人との接触以前の出自は双系であり、父系の親族と母系の親族双方同じ親族呼称を使用していたとされている。そのためタブーとして、父母双方の親族に対してインセストの規則がはたらいていた。理論上は、四従兄弟姉妹との婚姻は禁じられているが、実際には行われていたという報告がある [Suttles 1990]。

本稿における調査の中心は、Tsartlip 指定居留地の中にあるサーニッチ・トライバル・スクール（サーニッチの人々は彼らにとっての聖なる山の名である「ラフウェルネフ」にちなんで ŁÁU, WELNEW Tribal School / ラフウェルネフ・トライバル・スクールと呼んでいる。本稿でのセンチョッセン表記は、現地で使用されている表記法を用いる。）という学校である。この学校は指定居留地に入り、旧国道 17 号を徒歩 5 分ほど行った場所にある。校舎はサーニッチが属するコースト・セイリッシュ地域に共通の民族誌的「情報」に基づく家屋を意識して建てられており、人々を歓迎するサンダーバードの門や、サーニッチのトーテム・ポールが学校の正面玄関の前に立てられている。サーニッチの人々は、1989 年に、独自の学校区第 63 番学校区 / サーニッチを設立し、自らの手でこの校舎を建設した。それは十数年に及ぶ教育自治権獲得の戦いの結果生まれたものである。2005 年 10 月の時点で、5 歳から 15 歳までの子供たち約 225 名がこの学校に通っている。

サーニッチの特徴として、他の多くの北米大陸北西海岸先住民と異なるのは、サーニッチがユーロカナディアンと極めて隣接して居住していることと言えよう。サーニッチの指定居留地の南側とユーロカナディアンの居住区域は、舗装された狭い道路を境にして分かれている。一見して明らかなことはユーロカナディアンの居住する家屋はサーニッチの家屋に比べて大きく、きれいに塗装が施されていることである。その家々の周囲には、手入れの行き届いた英国風の庭園があり、生け垣がある。サーニッチの人々の家屋はそれらに比較すると小さく、家と家の間は境目を設けずに、古くて動かなくなった自動車や洗濯機などの大型家電品が乱雑に放置されている。指定居留地中の道路は舗装されておらず雨が降ると泥濘になり、車が通るたびに泥が跳

ねて、歩いていると泥だらけになってしまう。

また、サーニッチにとっての聖なる山ラフウェルネフの西側と東側も先住民とユーロカナディアンの居住区域がはっきりと分けられている。山の東側にはマウント・ニュートン・ハイキングコースという立て札がある。地図上では、この山はユーロカナディアンがつけた地名のマウント・ニュートンとなっている。その登り口付近はユーロカナディアンの豪邸が並んでいる。東側は山の中腹まで道路が整備されていて、自動車でも登ることができる。西側は木々に覆われて、「聖なる山」の風貌を見せるラフウェルネフが、東側は部分的にコンクリートで固められた人工的な山、マウント・ニュートンとなっている。山の東西の様子が、そのままサーニッチとユーロカナディアンの現状を象徴的に表している。この関係を背景として先住民サーニッチには日常生活があり、トライバル・スクールを通じて地域集団としての民族誌的「情報」を「資源」として流通する経路が構築されつつある。

## 2. B.C. 州における同化教育の歴史とサーニッチの教育自治

はじめに本稿の基盤として存在する、いわゆる「同化教育」について書いておかねばならない。ブリティッシュ・コロンビア州における同化教育はどのように始まったのであろうか。1887年に当時のインディアン省の長官が教育委員会にあてた手紙の一節から州政府のユーロカナディアンの先住民に対する同化教育の理念を読み取ることができる。

持っているもの（文化、土地）をすべて奪われた哀れなインディアンにそれらを奪った白人がその埋め合わせをするために白人と同じ成功の機会を与えるには、その後の人生の成功を約束させるような教育をインディアンの子供に施していくことである [Haig-Brown 1988: 31]。

上記の文中の、「白人と同じ成功の機会を与えるための教育」というのが、同化教育のことである。この教育理念は、教育自治を求める先住民運動が盛んになる 1970 年代まで、同化教育の根底にあり、先住民にとって学校とは、

自らの集団の民族誌的「情報」を否定される所であり、子供たちが各地域集団の民族誌的「情報」を継承する機会を失う場所であった。学校は、決して、先住民が自発的に行きたいと考える場所ではなかった。しかし、先住民が「学校」を自らの手で建設し、運営しようという発想が出てくるまでには一世紀近くもかかったのである。

ブリティッシュ・コロンビア州における同化教育は1870年代に、先住民の保留地にカナダ政府が宣教師たちを送り込んだことに始まる。その宣教師たちは、英語の強制使用とキリスト教主義の徹底を根幹とした教育システムを作り始めた。1880年代までは、ブリティッシュ・コロンビア州全域で、宣教師たちの家の居間や地下室を教室にして先住民に対する教育が行われたが、その教材のほとんどは宗教色の濃いものであった。そのような教会中心の授業は、1920年代まで続いている [Haig-Brown 1988: 31]。

1920年に Indian Act (インディアン法)<sup>1</sup> が修正された。そこには、先住民の子供たちに対する「ユーロカナディアン化」教育の強制が含まれていた。1930年代に入ると、宣教師に代わり、カナダ政府のインディアン省が学校の運営に携わるようになった。その結果、教育内容は宗教色の薄いものになっていく。当時、インディアン省は疾病による先住民人口の激減（これは、ヨーロッパ人との接触が原因といわれている）に対する対策として、各指定居留地に一人ずつ看護婦を雇用していた。そして、その看護婦の夫が自動的にインディアン省の作った学校の教師として採用されたのである。その際、彼らの教師としての資質や適格性は、問題とはされなかった [Haig-Brown 1988: 33-37]。

1940年代にインディアン省は先住民の生活や教育についての全権を握るようになる。同省の計画に従い、インディアン学校が建設され、1年生から8年生までの先住民の子供は、親元を離れ寮生活を余儀なくされた。9年生になるとユーロカナディアン家庭や、ユーロカナディアンの経営する工場などに雇われ、労働をしながら学校生活を送ることになった [Haig-Brown 1988: 77-85]。1947年には人類学者の Diamond Jenness が、教育委員会において「25年以内におけるインディアン問題に関する解決計画」と題して講演を行っている。その内容は、「保留地を解消し、同化教育を基盤とした総

合教育システムを設立すべきである」[Jenness 1963] というものだった。このようなユーロカナディアンによる上からの同化教育は、1960年代まで続く。

1960年代に入ると、政治的には先住民は参政権を得た。しかし、先住民の子供たちは学校で自分の民族言語を話すと、ユーロカナディアンの教師からムチで叩かれ罵られた、とインディアン学校で教育を受けた人々が当時を回想して語っているように、学校教育の理念は変化を見せていない。サーニッチのある長老の話では、インディアン学校では英語の使用が強制され、民族の言葉で話をするとは教師から石鹸で口を洗われたと言う。また、子供たちは教師たちと全く異なる粗末な食事しか与えられなかった。そうした寮生活を送るうちに、子供たちの中で、首長の子供であるとか、平民の子供であるという意識は次第に薄れ、喧嘩の強い者がリーダーとなり、新たな序列が子供たちの間にできていったという。その中で最も尊敬されたのは、腕力があり、教員たちの指示に対して無言で抵抗する者であったそうである。それは、全く新たな価値観を子供たちの心の中に生んでいった。ほとんどの子供たちは、学校を職業訓練所と見なしていた。そうしたインディアン学校に対する記憶を作家であり民族運動のリーダーである George Manuel は次のように語っている。「三つのことが私に学校時代をよみがえらせる。それらは、空腹と英語の強制使用と祖父のことで野蛮人と呼ばれたことだ」[Manuel and Posluns 1974: 63]。

1970年代に入ると、先住民とインディアン省との間で、教育改善に関する交渉が行われるようになった。1870年代から1970年代半ばまでの同化教育は、数多くの中途退学者を出していた。この主な原因は、先住民の生活の実情にそぐわない教育システムにあったと言える。言い換えれば、先住民の考え方を理解していない外部の人々（ユーロカナディアン）が管理・運営してきたことに原因があるのだ [Haig-Brown 1988: 98-114]。

さらに、ブリティッシュ・コロンビア州北部のニスガの人々には、1960年代の子供時代、隣のアルバータ州に強制的に移された記憶がある。そのため、その頃の先住民の子供たちは、地域集団としてのアイデンティティを失いがちであった。子供たちが親元で生活することは、民族誌的「情報」を伝

えていくための必須条件であった。また同時に、自宅定着を安定化し、地域社会を経済的に自立させるための専門的な技術習得には、高等学校卒業後も様々なかたちで教育を施していく必要があることが認識され始めた。そこで、指定居留地の中に学校を置き、専門的な技術教育を施そうという気運が生じてきたのである [渥美 1991]。

そして、1976年に、ニスガは、同州の先住民として初めて、居住する地域における教育の自主的管理、運営の権利を手にする。ブリティッシュ・コロンビア州では独立した学校区にはそれぞれの番号が与えられている。ニスガの学校区には92番という数字が与えられた。その第92番学校区（ニスガ）が設立されるまでの間に、ニスガは、カナダ政府やブリティッシュ・コロンビア州政府との度重なる話し合いを行ってきた。第92番学校区（ニスガ）は、彼らが長い闘争の末勝ち取ったものだったのである [渥美 1991]。サーニッチの学校建設もこのニスガの運動の成功が大きく影響しているのである。1980年代以降、ブリティッシュ・コロンビア州の各地で先住民の運営による学校が創設された。その結果、あからさまな同化教育は幕を閉じることになる [Haig-Brown 1988: 126-140]。

一世紀の長きにわたった同化教育は、1940年代から1960年代の約20年間に、先住民の民族語を母語としては、完全に奪い取ってしまった。1970年代の文化復興運動の中心になった者は、この時期にインディアン学校に在学した世代である。先住民は政府による言語略奪に抵抗する過程で、先住民としてのより強いアイデンティティを持つようになったと考えることができる。

先住民と教育の話をするときに必ず彼らが使う言葉がある。survive（生き残る）という言葉である。彼らは、ユーロカナディアンが強制した、「白人社会」との同化政策を「生き残るため」に受け入れざるを得なかった。だが、彼らの多くからは、その精神の奥に、抑圧の間、密かに何代にもわたってかたちを変えながら伝えてきた民族誌的「情報」に対する強い愛着とも見える感情が窺える。時代の流れとともに彼らの生活はヨーロッパ化してきたように見える。だが、それは、「生き残るために」表面上ユーロカナディアンの文化を取り入れるように見せ掛けながら、自分たちの民族誌的「情報」

を守る方法を身につけていったというのが大部分のサーニッチによる説明である。

その戦略をさらに未来の世代に伝えるためには、学校運営を自主的に行なうことが、どうしても必要だった。サーニッチが言う wisdom for survival (生き残るための知恵) が民族誌的「情報」を残したということができる。それは、長い間抑圧されてきた先住民の民族誌的「情報」のシステムは、事実として過去から一貫したものではないかもしれないが、部外者である筆者に向かって、サーニッチの人々は自分たちの観念の中では強固に過去と結びついていると主張する。それは、彼らが指定居留地の外で日常的に経験している(『白人』のように見えないこともないが)お前はいったい何者なのだ? という暗黙の問いかけに満ちた態度や視線に対する彼らの対応なのである。

### 3. サーニッチの学校の状況

#### (1) センチョッセンを取り巻く状況

テレビ、雑誌、インターネットを通じて様々な情報が氾濫している現在では、先住民の子供たちの中に十代で飲酒を始めてしまう者がいる。筆者が早朝にインタビューを予定していたある人は、約束の時刻から一時間以上も遅れてやってきて、筆者に「明け方、中学生の息子が酒に酔って帰ってきたことから口論になってしまった。今学校に行かせてきたところだ」と語った。近年、子供たちの中には、ラップミュージックのディスクジョッキーの英語を好む者が増えてきた。「おまえは、アフロアメリカンじゃないサーニッチなんだ。そのアクセントで英語を話すなら、センチョッセン(サーニッチ語)を話せ」と子供たちを叱ったことから激しい親子喧嘩になったと語る親もいる。

前述のように、1940年代まで、同化政策の為にユーロカナディアンが作った「インディアン学校」に子供たちは入れられた。しかし、ユーロカナディアンの教師たちから「落ちこぼれ」の烙印を押された子供たちは、寄宿舎を脱走する。そして、指定居留地に帰り、「生きるために」祖父母から先住民の民族誌的「情報」を学びながら育った。今では、彼ら自身がトライバル・

スクールに通う子供たちにとって祖父母の世代になっている。現在では、サーニッチの言語と民族誌的「情報」は、教育科目として学校で教えられている為に、学業成績の優秀な者が自らの言語を話すことができ、自らの民族誌的「情報」の量も豊富に持っている。筆者がサーニッチの学校で会ったある小学生の少女は自分の祖父母（センチョッセン）と両親（英語）の通訳ができるまでになっていた。

生徒たちの親の世代の多くは、ユーロカナディアン（ヨーロッパ系カナダ人）の学校へ通っていた為にサーニッチの言語をほとんど話すことができない。そこで、1980年代には、夕方に長老たちが先生となって大人たちにセンチョッセンを教える講座がサーニッチの学校の校舎を利用して開かれるようになっていた。

## (2) トライバル・スクールの様子

サーニッチの言語復興運動の拠点である学校の雰囲気は、つねに一定であるわけではない。カナダの政治経済的状况により、博物館の状況と同時進行するかのよう（カナダの政治経済的状况により、博物館の状況と同時進行するかのよう）にラフウェルネフ・トライバル・スクールの雰囲気も変化している。筆者が1992年に訪れた時は、サーニッチの言語と文化を復興させるのだという雰囲気が学校全体にあった。1992年までは、教育委員会もサーニッチ出身のフィリップ・ポールが入院中にもかかわらず病をおして委員長をしていた（フィリップ・ポールはブリティッシュ・コロンビア州のインディアン・チーフ・ユニオンを創設したことで知られている。彼はサーニッチ・トライバル・スクールの創立の推進力にもなった人であるが、多くの人々に惜しまれながら1992年に白血病で亡くなっている）。当時の校長はサスカチュワン州出身の先住民で教育学修士のロレッタ・ホールだった。彼女はトライバル・スクール創立時から1997年まで校長の任についていた。1997年における彼女の辞任の原因は、一般教員と言語補助教員（長老）の給料を同程度にする努力をしたこと（彼女が辞任した原因は、一般教員と言語補助教員（長老）の給料を同程度にする努力をしたこと）にあった。それまでは前者が圧倒的に高給であった。彼女のとった行動がフィリップ・ポール亡きあとの教育委員会の反対にあり、それ以降教育委員会との関係に軋轢が生じたという。

1999年までの変化の第1番目は、1997年から1999年の間の2年間に校長が3人交代していることである。初代の校長が提案した、みんなで朝食を

とる行事<sup>2</sup>は廃止され、先住民の言語センチョッセンの授業の為の予算も削られ、先住民の教員のオフィスでは新しいボールペンも購入できないという状況になっていた。学校の変化の第2番目は、先住民が作り上げたサーニッチ教育委員会の委員長がユーロカナディアンになっていたことである。フィリップ・ポール亡き後、様々なサーニッチ出身者が委員長になったそうだが、全く事務能力を備えていなかった等の不適格者が後を絶たなかったと言われている。そして、ついに1998年、「ユーロカナディアンに任せる」という、彼らの立場から言えば「屈辱的」なはずの決定を下すことになった。トライバル・スクール創立当時の委員であった長老たちは「インディアンの学校の教育委員長が白人か。昔に戻ってしまったようだ」と嘆いたという。このような決定の背景には教育委員会のメンバーの年令が若くなってしまい、フィリップ・ポールのような政治的手腕がなければ出来ない政策を簡単に切り捨ててしまった結果があるという。当時から2005年にかけて教育委員会の委員長は、オランダ系カナダ人で、この人物も現校長同様、先住民の民族誌的「情報」にそれほど積極的に関心を示していないと部外者には映った。筆者が参加した1999年2月25日のセンチョッセンの授業に関するミーティング中現在の校長と教育委員長は、一言も自発的に発言しなかった。これが原因で先住民の教員たちの彼らに対する不信任は増加した。

そのミーティングの出席者は、ヴィクトリア地域の教育委員長（彼女は50歳代後半のユーロカナディアンで非常に先住民の言語教育に熱心だとサーニッチの人々が感じていると言う）、サーニッチのとなりの学校区から言語教育担当の先住民の女性（彼女は以前サーニッチの学校の校長をしたこともあり、先住民の言語教育の行く末を真剣に考えている一人であると言う）だった。もう一人フランス系カナダ人の男性が来ることになっていたが、会議が始まって来ないので電話をしたところ、未だ睡眠中であった（彼は翌日の会議にも一時間遅れてきた）。他に、ラフウェルネフ・トライバル・スクールの教育コーディネーターと称するユーロカナディアン男性、そして、ラフウェルネフ・トライバル・スクールのセンチョッセン教師（筆者の友人たち）2人が出席した。

このミーティングで問題になったのがラフウェルネフ・トライバル・スクー

ルにおいて次年度（1999年9月から）のセンチョッセンの授業に6年生の30名のうち15名しか登録してないということであった。当時の校長と教育委員長は発言せず、ヴィクトリア地域の教育委員長が、焦らずどんなに人数が減少しようとも、続けていこうと励ました。すると、ミーティングの雰囲気が一挙にセンチョッセンの授業を支援していこうという方向に変わった。

筆者のユーロカナディアン行政官と接した経験から言えることは、公的教育の場で先住民の言語復興を助けていこうという姿勢は、政府の中で責任が重い人ほど協力的である場合が多いことである。それに対し、先住民と接することの多い現場の行政官に先住民の「文化復興」に否定的な雰囲気があるのを感じることがある。ここで先住民にとって問題となるのは、実際毎日の生活の中で先住民と接しているのは、そのような現場にいるユーロカナディアンだということである。

さて、1992年に存在した大人のためのセンチョッセンの講座は、1999年の時点で廃止されていた。現存する大人のためのセンチョッセンの授業は、志を持ち続けている7-8名の若者が長老をゲストに迎えセンチョッセンの学習を自主的に続けている同好会のような「集まり」のみである。また、トライバル・スクールにおける1998年度の卒業学年の30名のうち卒業できたのは6名であった。

ところが、2001年以降、ブリティッシュ・コロンビア州経済は徐々に上向きかけてきた。それとともにサーニッチ・トライバル・スクールに対しても教育予算が増加した。それと呼応するかのように、センチョッセン講座の受講生も増加した。また、センチョッセン学習を支援する為のホームページ作成の作業が始められた。さらに、2004年には、ブリティッシュ・コロンビア州経済の上昇と呼応するかのように、再び、各クラス全員の子供たちが熱心に学ぶ風景を見ることができた。サーニッチにおける民族誌的「情報」保存の活動はブリティッシュ・コロンビア州政府およびカナダ政府の経済的支援と深く結びついていることは、あきらかな事実である。そして、さらに、2004年には、長老たちによるセンチョッセンの発音を聴くことが出来るホームページも登場し形を整えつつあった。

そして、2008年2月の筆者の訪問時にはセンチョッセンの授業を毎日お

こなうようになっていた。筆者が調査を始めたころの1990年代の初頭では、センチョッセンの授業は週3時間が必修であと2時間が選択であった。2008年には、授業の長さが30分のが4回と45分が1回である。以前とは異なり、毎日センチョッセンの授業が各クラスで行われている（表-1参照）。

ŁÁU,WELNEW Tribal School

Grade 5, 2008

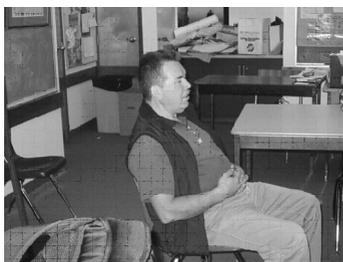
	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
8:30	Reading/Journal	Reading/Journal	Reading/Journal	Puzzles/Fine Arts	Puzzles/Fine Arts
9:00	Language Arts (spelling/grammer)	Language Arts (spelling/grammer)	Language Arts (spelling/grammer)	Language Arts (spelling/grammer)	Language Arts (spelling/grammer) Test
9:30	Math	Math	Math	Math	9:45am-10:15am SENĆOFEN
10:15	<i>Recess</i>	<i>Recess</i>	<i>Recess</i>	<i>Recess</i>	<i>Recess</i>
10:30	Library/ Quiet Reading	Computers	Computers	Computers	Handwriting (L.A.)
11:00	Social Studies	Social Studies	Social Studies	SENĆOFEN	Science
11:45	<i>Lunch</i>	<i>Lunch</i>	<i>Lunch</i>	<i>Lunch</i>	<i>Lunch</i>
12:30	P.E.	Science	Science	Science	Personal Planning
1:00	SENĆOFEN	SENĆOFEN	SENĆOFEN	1:15pm-1:45pm P.E.	1:15pm Dismissal
1:30	Language Arts (Novel Studies)	Personal Planning D.A.R.E. Program	Fine Arts	Fine Arts	
2:15	Clean-UP	Clean-UP	Clean-UP	Clean-UP	
2:30	Dismissal	Dismissal	Dismissal	Dismissal	

表-1 トライバル・スクールの時間割

そのためか児童たちがセンチョッセンを話す頻度は今までになかったほどである。このような劇的な変化は2004年から2008年までの間にJをはじめとするセンチョッセンの教師が様々な形での経済的支援の確保をしてきたことによる。子どもたちの熱心さもかつてないほどであり、センチョッセンによる歌（これは太鼓を用いて「伝統的」な歌を歌う場合と、教師が新しく作ったセンチョッセンの簡単な単語を用いた歌を歌う場合がある）やゲームなどの授業展開に工夫も見られ楽しみながらセンチョッセンを身に着けている光

景を目にした。また授業態度が好ましくないとき教師が感じたときには、児童たちが「ストーリー」と呼ぶ「口頭伝承」されてきた「はなし」が英語訳で語られる。

1986年の学校創立当時からサーニッチの学校の特徴は、校舎の前に「集団」の結束を訴えるトーテム・ポールが立っていることと、学校の授業には「民族」の言語と「神話」そして「伝統美術」や「伝統音楽」「伝統工芸」等を教える時間が設けられていることである。これらの授業は2008年になると非常に充実したものになり、児童たちの熱心な参加が見られるようになった。授業では「先住民」としての誇りが教えられ、ヨーロッパ人に支配される前のサーニッチの生活がいかに「深い精神性」を持っていたか繰り返し語られている。今やトライバル・スクールは民族誌的「情報」の経路として存在しつつある。また2008年2月の時点では、トライバル・スクールに「高校部」が新設される予定となっており、新学期（9月）完成を目指して建設工事が急ピッチで進められていた。



a. “story” を語るセンチョッセン教師 J



b. 『伝統的織物』の実習風景



c. 各児童の手に『伝統的デザイン』



d. 太鼓を用いて『伝統的なサーニッチの歌』を練習

#### 4. 「資源」としての先住民のイメージ

1960年代、アメリカの公民権運動の影響を受けて、カナダにおいても先住民の権利を認識する動きが出てきた。その時代に、ヴィクトリアにあるロイヤル博物館（当時の名称は州立であることを示す「プロヴィンシャル・ミュージアム」であった）も体裁を整えつつあった。そこでは、2階に先住民の様々な道具や美術品、3階に「開拓時代」から現在に至るまでのブリティッシュ・コロンビア州におけるユーロカナディアン生活の歴史が展示されるようになった。

その展示の仕方には明らかな演出があった。先住民の階は照明を極力暗くして展示物が暗闇から浮かび上がるような神秘的な雰囲気気で設置された。解説のテープは静かに彼らの精神世界を語る。それと対照的にその上の階にあるユーロカナディアンの展示は照明が明るく、楽しい雰囲気気で設置された。この展示方法が先住民の世界とユーロカナディアンの世界を理想化していることはすぐに理解できる。自然とともに生きる先住民の世界には、深い「精神性 (spirituality)」をもった「精神文化」があり、経済力を有するユーロカナディアンの世界には、豊かな「物質文化」があるという捉え方である。しかし、さらに注意して見ていくと、もう一段階深いレベルでの解釈が可能となる。先住民の深い「精神性」をもった「精神文化」は、カナダの繁栄の基盤にあり、豊かな社会が「なつかしさ」をもってふりかえる「過去」として見ることもできる（事実ユーロカナディアンはその「文化」を破壊してきたのである）。その「なつかしさ」を共有し、先住民の「文化」を「過去」のものとすることで、ユーロカナディアンが営む現在の生活と先住民の「文化」が「ブリティッシュ・コロンビア州」というキーワードによって一つの線上でつながるのである。博物館の展示は、このような一貫したシナリオを持っているという捉え方ができる。

このユーロカナディアンが提示した先住民の「過去」に対する「深い精神性」というイメージに呼応して、「現在」の先住民は、自らを「スピリット」と「名乗る」ようになってきた。例えば、ホームレスの先住民に仕事や住むところを世話しようという団体のパンフレットのタイトルが“Helping

Spirit Lodge Society”、先住民の女性団体のパンフレットの表紙にも“Spirit Women in the Strength of an Eagle”と記されており、先住民のためのエイズ予防のパンフレットのタイトルが“Healing Our Spirit — B.C. First Nations AIDS Society” (B.C. はブリティッシュ・コロンビア州の略)、インターネット上で雇用や起業に関する情報を先住民に提供している団体のホームページの名前が“Spirit of Aboriginal Enterprise”などのように、先住民そのものや、先住民と関わる事柄などにも spirit という言葉が使われるようになってきたのである。

博物館に見られたようなユーロカナディアンから提示された先住民の「深い精神性」を持つイメージは、自らが「社会から敬意をもたれる存在」ともなり得るという意識を先住民にもたらした。その意識が民族誌的「情報」に基づく生活様式の復興運動につながっていく。その運動の導火線の一つが、1970年代のトーテム・ポールの流行である。このブームにより、先住民に対する好ましいイメージがトーテム・ポールという具体的な「かたち」を通して、一般の人々にも広まったのである [渥美 1997]。このトーテム・ポールのブームは、先住民に、彫刻家として経済的に自立する機会を与えた。ハイダやクワクワカクゥなど北西海岸の北部諸族を中心に、トーテム・ポールの彫刻家が現れ、徐々に経済的自立の道を切り開いていった。<sup>3</sup>

また、言語に関してもユーロカナディアンの認識の変化がサーニッチに及ぼす影響もある。筆者の友人 A は、成人後サーニッチの言語であるセンチョッセンを長老たちから学んだのだが、今では長老たちと日常会話をセンチョッセンで行なえるほどになった。彼はあらゆる場面でセンチョッセンを使う決心をした。食事の前の祈りもサーニッチの創造主であるフサルスに捧げる為にセンチョッセンで行なっていた。以下は A が筆者に語った話の要点である。

ある晩、私の妻の父親宅で開かれた夕食会に私と妻は招かれた。妻の父親がユーロカナディアンである為に、数名のユーロカナディアンがその食事に同席していた。私は、義父から食事の前の祈りを依頼された。私はいつものように、センチョッセ

ンで祈りを捧げた。それが、その場にいたユーロカナディアンたちに感銘を与えたようだった。彼らは、祈りの内容は理解できなかったが、感銘を受けたと私に言ってきた。ところが、私の祈りを聞いていた、他のセンチョッセンを話すことができないサーニッチの大人たちの中には私を「見せびらかしている」といって非難した者がいた。

A は、この出来事で非常に傷ついたと語った。彼は常にサーニッチの言語復活を願い、その実現に向かって十数年も努力を続けている。その努力が「見せびらかす」目的のみで継続されてきたとは考え難い。むしろ、A に投げつけられた中傷の背景に浮かび上がってくるのは、先住民が「母語」を話すという行為に、彼らの「同胞」からだけでなく、彼らに好意的なユーロカナディアンから称賛が寄せられるという状況である。換言すれば、先住民が現代のカナダ社会で「尊敬」を得る為には、先住民の言語を自由に話す能力（少なくともそのように見える状態）が外部から期待されているのだ。この「期待」が、「母語」を話すことができない先住民の心の中に「葛藤」を生み出す要因となりうる。その「葛藤」の発露として、40代から50代のサーニッチの一部には、センチョッセンを話せるようになった同世代の者に対する「嫉妬」とも見て取れる感情が存在することがある。

先住民の言語復興運動は、先住民がユーロカナディアンから抑圧されたという民族誌的「情報」を共有することを基盤とする。1940年代以前に初等教育を受けた長老たちと、米国に公民権運動が盛り上がり、その影響によりカナダにおいても教育の自由化運動が起きた1960年代以降に教育を受けた若い世代とでは、その獲得のプロセスが異なっている。かつて、長老たちは、幼い頃、ユーロカナディアンの言語（英語）を学ぶことが社会的地位向上につながる教えられ、「インディアン学校」でセンチョッセン（サーニッチの言語）を話した時、罰として教師たちによって口に石鹸入れられた記憶がある。そして英語で話す習慣が身についたある日突然「今日から学校に来てはならない」と教師から言われたということである。長老たちの学校教育がほとんど小学校低学年で終わっているのはその為だという。つまり、「落ちこぼれ」の烙印を押されなかった者も、結局は学校教育から排除されたと

いうことである。幼い頃の長老たちに英語を教えた教育自体の目的が「同化」であった。先住民を「教育」しなければならないという「思想」は、英語を学んで都市に出て経済的に豊かな生活を夢見た先住民が、様々な差別と挫折を経験したという結果を導き出した。そのような記憶から長老たちには、ユーロカナディアンという言葉である英語を強制使用させる政策に対する強い不信があるという。だからこそ、サーニッチの多くはセンチョッセンを保ち続けてきたという。そして、英語が「嘘をつく言語」であるのに対して、センチョッセンは「嘘をつかない言葉」だという「情報」が生まれた背景にはそのような経緯がある。

一方、英語を第一言語として身につけている若い世代は、センチョッセンという自らの母語であるべき言語を第二言語として学ばざるを得ない状況にある。すなわち、センチョッセンは生まれたときから自然に学んだ言語というよりも、その習得を目指す言語となったわけである。さらに、言語学習を通じて、センチョッセンを第一言語とする長老たちへの敬意が生まれ、センチョッセンは「神聖な／『真実』の言葉」であるという意識が吸収されてきたと筆者は見ている。言語習得には時間と努力が必要であり、その習熟度には個人差がある。しかし、センチョッセンの言語能力は未熟な者であっても、その言語を神聖視する強烈な意識というものは持つことが可能である。そのような状況の中で、「センチョッセンによる語り」以上に「センチョッセンについての語り」が盛んになった。そこで、本来の「母語」の言語能力差を埋めるかのように「センチョッセン像」とでもいうべき自らの言語に対する「神聖な」イメージが共有されていくことになる。

博物館の展示の仕方とセンチョッセンによる祈りに対するユーロカナディアンの賞賛には明らかにつながりがある。それは、ユーロカナディアンにとって、自らが奪った先住民の「文化」は敬意を持って対応されるべきであるという奪ったものに対するノスタルジア [ロサルド 1998: 104-111] があり、それがユーロカナディアン社会の「善意ある」「教養ある」人々の間に広まっている。皮肉なことに、このイメージこそ本稿が「資源」として捉えている経済活動の基盤となって先住民の経済的独立の可能性を作り出しているのである。

## 5. 「資源」としての長老たちが持つ民族誌的「情報」

1972年当時、サーニッチの子供たちは、ユーロカナディアンのカソリック神父が校長をしている小学校に通っていた。そこで用務員をしていたサーニッチの長老ペナーチ（英語名ディブ・エリオット）は、放課後、希望する子供たちにセンチョッセンを教えていた。彼は、思いついた単語やフレーズをペーパータオルの上に書き込んでその日の授業を考えていたという。そのペーパータオルの山をまとめたものを1973年に教材としてガリ版印刷した。そのときは国際音声記号（International Phonetic Alphabet: IPA）を使っていた。しかし、その記号で子供たちに発音を教えていくのには困難があった。そこで、ペナーチは中古のタイプライターを購入し、子供たちにもなじみのあるアルファベットを使ってその文字にさまざまな記号を加えて独自の発音記号を作り上げた。1978年まではIPAと彼の独自の記号を併用していた。やがて1981年には、センチョッセンを母語とする長老の中では最も若いアール・クラックストーンとともに、簡易印刷によるテキストを完成させる。1983年にペナーチは亡くなってしまったが、その死後3年たった1986年にサーニッチにトライバル・スクールが設立され、1988年にはカリキュラムにセンチョッセンの授業が導入された。そのときに使われたテキストがペナーチによって作成されたものであった。そして1993年以降センチョッセンの神話を扱った教科書やリーフネットという伝統的漁法を説明した教科書などが、センチョッセンの授業のために毎年印刷されるようになったのである。

そして、2004年以降、First Voices というホームページのなかにセンチョッセン「情報」が詰まったコーナーが成長をつづけている。このホームページは1990年にオーストラリア出身の教師Ptがサーニッチのトライバル・スクールに赴任してきたことに始まる。彼は小学校の1年生の担任となった。彼は大のコンピューター好きで、その自分の趣味であるコンピューターの知識を教育に生かしたいと考え、試行錯誤をくりかえしていた。やがて1999年に、トライバル・スクールのコンピューターを新しいものに入れ替えるということが決まった。その年から4年間にわたって、各生徒に年間350ドルの補助があたえられることが州議会により決まった。あたらしいコンピューターが

入るにあたり校長は Pt にコンピューター専門の教師にならないかと提案した。その年、Pt はコンピューターを専門に教える教師となった。そのような状況の中で Pt は、サーニッチでセンチョッセンの教師 J と親しく話をするようになる。J はセンチョッセンの教育にコンピューターを使えないか考えていた。彼は、現在 20 名ほどのセンチョッセンを第一言語とする長老たちが徐々に亡くなっていく状況で、長老たちの肉声を録音するという活動を先住民の女性 B とともに進めていた。J はその録音したものをコンピューターに取り込んで、長老たちの発音を子供たちに聞かせて練習させるプログラムがつかれないかと Pt に相談を持ちかけたのである。

そのような相談を受けたある日、Pt はインターネット上で language という語で検索を続けていた。そのときにあるホームページが目にとまったという。それは、世界のあらゆる言葉を簡単に翻訳するフリーソフトを提供しているものであった。サーニッチの言語練習プログラムに可能性が出てきた。2000 年の 3 月 16 日に、Pt は、そのホームページの製作者にメールを送った。内容は、そのソフトに音声を載せることはできないかということであった。2 日後に返事が届き、それは、可能だということであった。そこで彼らの協力のもと、2001 年に、センチョッセンの長老たちの録音した声をはじめてコンピューターで聞けるようになった。ところが、サーニッチのトライバル・スクールのホームページには予算が足りなかった。そこで、Pt は、First Voices というカナダのみならずアメリカも含めた北米の先住民の言語を残す目的でつくられた組織に連絡をとる。その組織はカナダ政府からの資金援助もある。Pt は、そのホームページを作成している協会に連絡をとり、センチョッセンをそのホームページに載せてもらうように頼んだ。そして、この、いまだ成長過程のホームページの中心的言語としてセンチョッセンが位置することになった。やがて 2003 年、Pt はトライバル・スクールの辞め、First Voices 専属の職員となった。そして、2004 年の時点で、Pt とサーニッチの有志の努力により、センチョッセンの 2,311 の登録単語のうち 164 語が長老たちの声で聞くことができる。これらはすべてペナーチが考え出した母語として話したセンチョッセンを保存する方法（表音記号）を「資源」として発展してきたものである。

このセンチョッセンの言語復興と同時に、その他サーニッチの「過去」の生活のシステムを伝える知識として、長老Iの鹿の猟についての豊富な経験と知識、長老Eのリーフネット漁と呼ばれるサーニッチ独自の漁法をはじめとするサケ漁についての豊富な経験と知識という豊かな「資源」が存在する。また、長老ペナーチが持っていたセンチョッセンによるサーニッチの地名についての豊富な知識とヨーロッパ人との接触以降の話は、次の世代のセンチョッセン教師たちに受け継がれ、授業の中で子どもたちに聞かせている。これは口頭伝承として子どもたちがそのコンテンツ「内容」を次の世代に伝える働きもしている。そして、長老たちのもつ民族誌的「情報」は、少しずつ印刷教材として製本化されつつある。

## 6. 経済的に自立する芸術家たち

### サーニッチにおける2人の芸術家の事例

現在のサーニッチの経済状況を考える上で最も重要なことは、ユーロカナディアン社会に先住民の美術が非常に高い価値を持って受け入れられているという社会的背景である。例えば、1999年には、サーニッチの指定居留地の近くにあるスーパーマーケットの入り口にはサーニッチ出身の芸術家Cの製作したトーテム・ポールが4本も建てられた。その後さらに、レストランなどにもトーテム・ポールの建立が計画されている。2004年には、4本の異なるトーテム・ポールがヴィクトリア市民センターの入り口に建てられた。また、もう一人の若手のサーニッチの芸術家Chの作品は、カナダ東部のあるデパートの包装紙のデザインに採用され、他の作品はアメリカのテレビ番組のセットとして採用されるほど北米規模で注目されつつある。さらに多くの若者が経済的な自立を目的として芸術家を目指している。

そのような若き芸術家の作品はサーニッチの神話をモチーフとしているものが多い。街では、先住民に近づきトーテム・ポールの意味を熱心に尋ねるユーロカナディアンの買い物客や観光客の姿もよく見かけた。つまり、ヴィクトリア市周辺の観光地や商業地域にトーテム・ポールが建てられるたびに、この「情報」としての神話がサーニッチの人々にアイデンティティを確認さ

せる働きをしているのだ。サーニッチでは、このような美術作品制作の技術的「情報」の伝わり方が、例えば先住民の美術振興のための学校を設立したオーストラリアのアボリジニーのようにはまだシステム化されていない。そこで、個人が博物館や古いトーテム・ポールなどから自分で表現を学び、作品を作り上げ、それをユーロカナディアンマーケットに出すという経路ができていた。そのなかで評価が高ければ注文が増え、さまざまな場所やさまざまな表現手段（例えば、前述のようにデパートの包装紙や観光パンフレットの中の挿絵などから州政府の出版物にいたるまで）に作品発表の場が与えられている。

### (1) C の事例

サーニッチで現在活躍中の彫刻家の一人にCがいる。1943年にツァートルリップ・リザーブに生まれた彼は、6才からガラスの破片を見つけてはそれを使って木を削っていたという。9才から本格的に彫刻を始めた。その頃同時に絵も描き始めた。当時、先住民の間に結核がはやっており、学校で結核予防のポスターのコンテストがあった。彼はそれに入賞した。それ以来様々なコンテストに応募して毎年入賞した。14才の時にカヌーの櫂を彫り始めた。

やがて、Cは19才で学校を卒業すると、海に浮かんだ材木を陸まで運ぶ労働者となった。この、昼間は肉体労働を行ない夜は彫刻を彫るという生活を2年程送る。21歳の時に彫ったマスク（スピリット・ダンスと呼ばれる踊り用の仮面）で初めて現金を得る。それ以来、昼は肉体労働、夜は、注文を受けての彫刻作業を29歳まで続けた。30代で彫刻家として自立する。当時、ハイダヤクワクワカワクウの彫刻家には政府の援助金がたくさん入った。だから、ヴィクトリア周辺で売られている土産物用のトーテム・ポールは、たいていクワクワカワクウのデザインをミニチュアにしたものだった。当時のサーニッチもクワクワカワクウのデザインを「伝統」的美術として学んでいたのである。

この時代の社会的状況で土産物の「伝統」的彫刻を行っていた彫刻家は、その状況で広く受け入れられていた土産物の標準的「情報」を受け取り、製

品を製作し社会に送り出していた。この場合、「情報」の回路には、顧客＋政府の補助金政策→先住民彫刻家→顧客という形で、ユーロカナディアン社会が介在していることになる。この時代のユーロカナディアン社会はクワクワクウのデザインを北西沿岸地域のシンボリック的存在として認識していた。

しかし、Cは、コースト・セイリッシュの美術にこだわり、博物館に残されている古いコースト・セイリッシュの彫刻をすべて模写した。毎日彫刻刀と木片を持って博物館に通ったそうである。当時の博物館は、今よりもずっと自由なことができたと言はる。このようにして、彼は、博物館に情報として保存されていた作品から、独学でその技術と表現方法を学び取り、コースト・セイリッシュの彫刻を復活させようと努力を重ねてきたのである。ここで新たな情報発信のagentとして、大学と博物館が登場することになる。博物館は「コースト・セイリッシュの」という表示のついた「博物館資料」を展示した。Cはこの博物館展示から「情報」として——「コースト・セイリッシュの」彫刻デザインと彫刻技法の「情報」——を獲得したことになる。やがて、地元の大学のキャンパスにサーニッチの神話をモチーフにしたCのトーテム・ポールが建てられた。その後、Cは、地元だけでなく、日本などの外国からの注文に応えた様々な作品を生みだしている。<sup>4</sup>

機会があるごとに繰り返して述べていることであるが、筆者が「民族誌的『情報』」という語の必要性を強調するようになったのは、このCに対するインタビュー時に発した筆者の問がきっかけであった。筆者は、何十年と親交のある彼の師匠の名前すら知らなかったことに気づき、尋ねた。筆者は、コースト・セイリッシュの「民族美術」を守っているCなのだから、当然、その「伝統文化」を先輩の彫刻家から学んでいると思込んでいた。ところが、驚いたことに、彼は博物館の展示を模写する過程で「伝統的手法」を独力で学び取ったことを話してくれたのだ。

そのとき「文化」に対する筆者の思い込みが分かったのである。筆者は、まだ「文化」を固定的に捉えていて、人から人に伝えられた有機的なつながりを持つ「結果」にあると捉えていたのだ。そして、Cのこの発言を聞くまでの筆者は、文字や記録媒体、博物館の陳列品という情報に形を変えて残さ

れたものは、現地の人々の「現実」から切断されたものだと思い込んでいたのである。

ところが、そこにはこの状況に対応するプロセスが存在した。そのプロセスには非常に生命力に満ちたエネルギーが存在する。筆者はそれを「生存力」と呼んでいる。この「生存力」とは、サーニッチの日常から有機的なつながりを奪われた神話などの民族誌的「情報」から新たな作品やシステムを生み出すエネルギーだと考えられる。そのエネルギーが新たな民族誌的「情報」の循環システム構築へとサーニッチの人々をつき動かしているのである。Cが作品を生み出す基盤にはこのエネルギーが存在すると考えられる。さらに、他のサーニッチの人々にとって、Cが民族誌的「情報」を基に作り上げた作品自体が地域集団のアイデンティティを強化する根拠となり得るのである。

Cの作品で記念碑的なものはヴィクトリア大学にあるトーテム・ポール(写真1、2、3)であろう。彼はこの仕事を依頼されたとき、このキャンパスがある場所に関する神話を長老Eから聞いた。それは以下のような内容である(以下の文はCが筆者に語った話の要約である)。



写真1 ヴィクトリア大学にある  
トーテム・ポール 正面



写真2 ヴィクトリア大学にある  
トーテム・ポール 背面



写真3 ヴィクトリア大学にある  
トーテム・ポール 右背面

昔、ある夫婦がいた。男はロング・ハウスのメンバーで冬の間中、妻から離れた場所ですピリット・ダンスをしていた。ある冬の祈りの季節が終わる頃、男はフサルスに声をかけられた。フサルスは、「お前のスピリット・ダンスは良かった。とても良い祈りの季節だった。そこで、お前に褒美をあげよう。今からお前は人の体の中をなんでも見ることができる力を持つことができる。それはどんな病気でも見通してしまえる力だ。だが、その力があることを誰にも言うてはならないぞ」と言った。男は喜んで感謝し、約束した。男は家に帰り、妻に久しぶりに会った。夫婦は喜びあい、妻は冬の祈りの季節についていろいろ尋ねた。男はいろいろな出来事について話をした。ところが、男はフサルスからもらった力のことまで話してしまった。男が妻にそれを話してしまった瞬間、大きな声がつワッセン（現在フェリーの港がある場所）から聞こえた。フサルスの声だった。男はフサルスとの約束を破ってしまったのだ。男は妻とカヌーに乗って逃げようとした。その時、フサルスは夫婦に向かって石を投げた。夫婦は石に当たってしまい、体が石になってしまった。

この神話の夫婦が石に変えられてしまった場所がヴィクトリア大学のキャンパスがある場所なのである。この夫婦岩は現在も見ることができる。Cは、サーニッチのこの神話をモチーフにヴィクトリア大学から依頼されたトーテム・ポールを製作した。彼の真意は、この土地が先住民の土地であった事実を後世に伝えていきたかったということである。

1980年代初頭、サーニッチの人々による手作りの学校建設の話が持ち上がり、当時健在だったフィリップ・ポールを中心に実行に移された。Cは若者たちに、自分のデザインしたトーテム・ポール（写真4）をポールの削り方から教えながら作らせた。また、同学校の壁面にあるサンダーバード（サーニッチの神話によれば「知恵」を表す）



写真4 トライバル・スクールのトーテム・ポール



写真5 正面玄関の上のサンダーバード



写真6 イーグル



写真7 体育館の壁面

やイーグル（「力」を表す）をデザインして、これも若者たちに色を塗る作業をさせた(写真5,6,7)。この作業を通じてCは自分で学び取ったコースト・セイリッシュの美術を若者たちに伝えていったのである。これにより、若者たちはコースト・セイリッシュの美術をCから「継承」していくことになる。Cが獲得した民族誌的「情報」に新たな経路が生まれたのである。

1990年代末にCは近隣のスリフティーズというスーパーマーケットから仕事の依頼を受ける。スーパーマーケットの入り口に4本のトーテム・ポールを建てることになる。このポールは近隣のユーロカナディアンたちからも絶賛され、今やこの地域のシンボリック的存在になる(写真8)。そして、2000年代に入ると、ヴィクトリア警察の本部という公的機関の建物の正面玄関に立てる作品を依頼される。バンクーバー島というイメージ、カナダというイメージを来訪者に印象付けるのに公的建築物にもコースト・セイリッシュの



写真 8 スリフティーズの入り口のトーテム・ポール



写真 9 ヴィクトリア警察の前のトーテム・ポール



写真 10 ヴィクトリア警察の  
前のトーテム・ポール

美術が必要とされるようになったわけである（写真 9、10）。

そして、また新たな展開として 2005 年に完成した大型リゾートホテルのシンボリック的存在として C の作品が陳列され、同ホテルは製作依頼の窓口にもなっている（写真 11 ホテルのホームページより転載）。

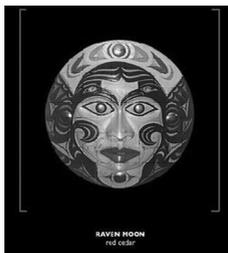


写真 11 プレントウッド・ベイ・スパ  
にあるワタリガラス

また、英国風の庭園で有名なブッチャート・ガーデンの土産物（写真12）としてもCの作品は登場する。このようにCの作品はサーニッチの中から始まり、やがて近隣の間で評判を呼び、やがてヴィクトリア市の公的建築物に至り、全カナダのユーロカナディアンが目にするところにまで及ぼうとしている。「芸術作品」を生みながら、同時に、同じ姿勢で「土産物」の制作もこなしている。ここに、美術館や博物館に収められる、西洋社会における「芸術」という高い価値観と「土産物」という、それに対して低い位置で見られる作品を、Cは区別なく受注する。そして、「インディアン」の美術を気に入って買ってくれる人にたいして同じ態度で接する。彼は、かつてその作法を禁じられた先住民の美術作品をいまや多くの「部外者」が求めてくるという状況を喜んでいるのだ。それは、土産物を製作していた彼が博物館や大学からの注文を受けるようになったからといって変化するものではない。彼は、博物館や大学といういわば「権威」から注文が入る状況になったことが、土産物を製作することを下に見るという価値観を持ってしまっただけで、自分が「白人」になってしまうという。どこから依頼されたものでも同じように仕事を誠実に行う。これが、彼にとって自分がサーニッチであることの証だということである。



写真12 ブッチャート・ガーデンの土産コーナー

## (2) Ch の事例

Ch は、1969 年にツァートリップ・リザーブで生まれた。彼は早くから前述の彫刻家 C を通じてコースト・セイリッシュの美術に関心を持っていたが、芸術家として身を立てようと決心したのが 26 歳 1995 年のことであった。Ch は 1995 年ブリティッシュ・コロンビア州北部に住む先住民のツィムシャン出身の高名な芸術家ロイ・ヘンリー・ヴィッカーに師事していた。その当時ヴィッカーが中心となってバンクーバー空港のターミナルビル内に先住民の美術作品を展示することになった。その時にヴィッカーの作品の製作の手伝いをしたのである (写真 13)。

それ以前から、Ch も北西沿岸の芸術家である C やスーザン・ポイント、マーク・プレストン、ジョー・ウィルソン、ビル・リード等の作品から北西沿岸先住民の芸術を学び取っていたがすべて独学であった。しかし、ヴィッカーという師と出会い、ヴィッカーの出身であるブリティッシュ・コロンビア州北部のツィムシャンの近隣にあるヘイゼルトンで本格的に学ぶ機会が訪れる。ヘイゼルトンにあるクサンの人々が設立した先住民の為の美術学校で、ヴィッカーのもと Ch は本格的に北西沿岸先住民の芸術を学ぶチャンスが訪れたのである。ここで Ch は、ヴィッカーのもとで先住民の絵画作成のため



写真 13 バンクーバー空港内

の民族誌的「情報」を獲得したが、それらの民族誌的「情報」は、厳密に言うとは、Chと異なる地域集団のものであった。しかし、Chはそこで初めて本格的に（広い意味での）カナダ西部（北西沿岸先住民）の美術を理解するようになったと語る。そして30歳の時、師のヴィッカーの要求に期待通り答えたということで、さらに2年間ヴィッカーから直接学び、芸術家として、またユーロカナディアンと商業的交渉を行うビジネスマンとしての技術を習得する。初期の作品は北西沿岸地域の民族誌的「情報」に忠実なモチーフを丁寧に描いていた（写真14、15、16）。



写真14 鯨



写真15 神聖な季節



写真16 賢者のフクロウ

やがて、Chは独自の表現スタイルと表現力を持ってカナダ全土の美術市場にも頭角を現す。北西沿岸地域の民族誌的「情報」から得た表現方法を使って、独自のモチーフを表現するようになる（写真17、18、19）。サーニッチ出身の芸術家という意識から、Chは民族誌的「情報」に基づく美術の世界と近代



写真17 とんぼ



写真18 無題



写真19 8月のベニザケ



から彼が学び取ったもの、そして彼の内部の自我を表現しているという。また、2004年以降、Chは用いる素材を紙や木、ガラスや銀に限定せず新たな素材を積極的に取り入れている。それに加え、Chは現代美術の芸術家としての彼とサーニッチの一員としての彼との「仲介的存在（とChが呼ぶ）」として「祖先から始まる（とやはり、Chが呼ぶ）表現方法」（これはChがCと同じように博物館に展示されているトーテム・ポールなどからヒントを得たものと思われる）を使って作品を発表している。それらは、Chが幼い時に長老Eや母方の叔父から聞いた神話（民族誌的「情報」）を基に、彼が成人して北部の人々から学んだ表現方法と「ずっと前の祖先から始まる表現方法」の双方を用いて生み出された作品である。それぞれの作品についてChは以下のように語っている。

「私は自らをセイリッシュの人間であり、サーニッチの一人として変化を理解する。サーニッチの人々は自然界の中で季節の変わり目を自覚する。考えてみれば、それはどこの地域でもおなじであろう。我々はこの地球の仲間だったのだ。この惑星も人間も変化を避けることはできない。変化が我々を成長させるのだ」と言う。そしてChは続ける。「私は幼い頃、私もやがて変化し、老人になり、いつかは死ぬのだということを知った。それを考える感覚は、川の中で流れの強い力が私に向かってやってくる時に立っているときのものに似ていた。そう考えると元気になった。そして、それは私の感情に訴えるものがあつた。涙が出てきた。涙が生命の強烈さを認識させてくれた」。

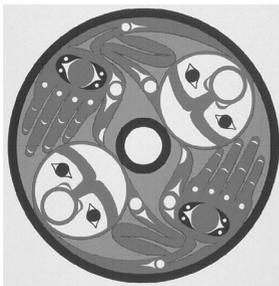


写真 26 「変化の手」

Chにとって「変化の手」はこの理解を含んでいる。これはChにとって最初の絵画としての作品であり、北部（\*具体的にはロイ・ヴィッカーをはじめとするヘイゼルトンという地域に居住するクサンの人々の美術）の影響から（サーニッチの属する）コースト・セイリッシュのデザインへのChの移行を示している。これは、Chの美術の大きな「変化」への転換点を示している。そして、それはChが劇的な変化

を経験した時であった。Ch は次のように語る。

この絵は私の終わりなき学びの道を意味している。それは私を癒してくれる。また、それは私の強さと弱さを示している。それは私自身や家族、友人たちを確認させてくれる。変化した手は私を今のような生活に導いた。私は人生における重要な人々を迎えたり、送ったりした。私の両親、私の従兄弟たち、友達と家族。時には、私は変化を余儀なくされた。でも、そのときはまだ準備が出来ていないように思われた。しかし、別の手が私に差し伸べられた。それは、留まる手と心を落ち着かせる手だ。それはたくさんの変化を見てきた手である。

また「治癒者」と言う作品には次のような民族誌的「情報」がモチーフとなっている。それは次のような話である。

ある男が通いなれた道があるいていたとき、目の前の草むらにがさがさする音があったので立ち止まった。ヘビとカエルが目の前で戦っていたのだ。ヘビに捕まった状態から逃げる最後の手段としてカエルは高く飛び上がり、曲がって逃げた。ヘビは食べ物がなくなり不機嫌になった。カエルは怯え、ケガをして座っていった。カエルはよくある雑草の近くまで足を引きずっていった。傷を癒すためにカエルはうねのあるオオバコの葉に身を包んだ。男がその日遅く、その場所に戻ると、カエルはうねのある毛布を広げて無傷の様子で出て行った。

このようにサーニッチの民族誌的「情報」によれば、カエルは治療者とされており、カエルは水の要素と結びつき、サーニッチの人々の感情と深く結びついているとされている。カエルたちの歌は癒し、清めるとされる。オオバコはずっと長い間普通の傷やひりひりする傷、毒性のものによってかまれた場合や刺された場合に用いられてきた。カエルの色とイメージは地球の自然に対して真実の色とイ



写真 27 「治癒者」

メージだと Ch はいう。

Ch の母方の叔父が、あるときこんな話をしてくれたという。

昔、3人の巨人がいた。彼らはその土地の人々と仲良く暮らしていた。ある日、その巨人たちは、人間たちを虐待した。巨人たちは背が高かったので、非常に有利だった。弱いほうの人間たちはひどい扱いを受けた。創造主はこの巨人たちを見て教訓を与えなければならないと思った。そして罰として3人の巨人たちは巨大なシダー（ヒノキ科の針葉樹）の木に変えられた。彼らは永遠に立っていなければならず、抑圧した人々を養っていかなければならなくなった。

この話が「シダーの人々」という作品を生み出した民族誌的「情報」である。



写真 28 「シダーの人々」



写真 29 「再生」  
「豊かな川の色を背景に紡錘車のまわりを回っている二匹のサケ」

Ch の心の中にあるこのイメージはサーニッチの人々の中の一人にあてはまったという。シダーはサーニッチにとって奇跡の象徴であり、サーニッチのテクノロジーの源泉である。サーニッチはシダーからカヌーを作り、ロング・ハウスを建造し、夏の間の棲家を造り、ポウルや取手、そして火もシダーを燃やすことで作られる。すべてがシダーの木から生まれるのである。シダーの木はサーニッチの守り神だと Ch は考えていると言う。シダーの木はセンチョッセンで『大切』を意味する。Ch はツァートリップというシダーのロープの故郷出身である。この絵が完成する頃、Ch は兄と一緒に仕事をしていた。その時 Ch は人々が協同するときにかもし出す強い結びつきを実感したという。

作品「再生」の背景には次のような民族誌的「情報」が存在する。サーニッチの人々はサケに対して畏敬の念を持っている。それは

昔、「サケの人々」が「海の人々」であるサーニッチの生活を哀れに思い、自らの身を投げ出してサーニッチの人々を救ってくれたという話があるからである。故にサーニッチの人々はサケに敬意を払い、その生命サイクルに喜びを見出すという。そして、同じように、自然のリズムというものが、誕生、青春、成熟、老年、そして死という人生の節目に付き従い、人々は母の胎内の水から生まれ大地の土に帰るといった民族誌的「情報」がサーニッチによって共有されている。サケのようにサーニッチも自らの生まれた水に帰る。サーニッチの人々はその人生にどのようなことがあっても、最後には故郷に帰るとのことになっている。「再生」のイメージの中心は往き来する2つのスピリットである。サケも人間も同じくこの人生の間に往き来する。「サケには故郷へ帰る特別な使命がある」というサーニッチの世界観（民族誌的「情報」）がこの作品の根幹をなしていると Ch は指摘している。

さらに、本稿において最後に紹介する Ch の作品である、「リアム・ベアー」（写真 30）は、アメリカ ABC 放送の人気シリーズである病院ドラマ「Grey's Anatomy（グレイの解剖学）」でセットの一部として採用されることになった。出発点として Ch は自分の出身地と異なる先住民の「伝統的」美術を自分の出身地とは異なる師匠について学んだ。その強い影響を受けながらも、やがて自分の原点であるサーニッチの民族誌的「情報」から独自の作品を生み出した。その独自の作品は国境を越え、いま北米中の人々の目に留まるような状態になったのである。



写真 30 リアム・ベアー

## おわりに

本稿は、サーニッチの現状報告を通じて一般的に語られる「文化」というものが成立する以前の状況が存在していることを指摘し、その動態の状況における諸要素、諸活動を民族誌的「情報」と呼んで考察を進めてきた。一般的に語られる静止画像としての「文化」という語は構成員が均一な集団を前提としてイメージされてしまう傾向にある。「文化」を語ろうとするとまず集団内の人々の均質性が暗示され、個人はその説明を補完するための一例として付け加えられる傾向にある。つまり、「文化」のために個人の顔が伏せられて、その代わりに集団が強調され、個人はその延長上で推測されるにとどまっていた。

それに対し「情報」という視点から同じ風景を眺めると、より明確に個人の人を確認することができる。サーニッチの場合、長老たちの持っている民族誌的「情報」を基に、学校のカリキュラムや美術作品を作り出すという新たな社会システムが作られつつあり、それらを積極的により広い世界に向けて発信している状況が立ち現れてくる。サーニッチの学校におけるセンチョッセンの授業がその一例を示している。ペナーチという長老が残したセンチョッセンに関する「情報」のシステムはJという次の世代が引き継ぎ発展させ、やがてPtという協力者を得てコンピューターに保存されることになった。このシステムにおける「情報」は量も少しずつ増加しながら、サーニッチの人々にフィードバックされている。それだけでなく、この民族誌的「情報」の新たな経路は、世界中の人々がセンチョッセンにアクセスすることを可能にした。

また、本稿が取り上げたサーニッチの2人の芸術家の事例は経済的自立のプロセスを示している。この2人の芸術家の事例から見えてくるのは、個人のネットワーク上で流通する民族誌的「情報」の存在である。そこには民族誌的「情報」の受け手が自分の受け取った「情報」から新たな作品という「情報」を創りあげ、サーニッチ内部へは「教育」というネットワークを通じて送り出し、外部へは経済的回路を通じて送り出すというプロセスが存在する。この経済的な背景がネットワーク成立の重要な鍵となる。

さらにその「情報」における経済的ネットワークの地域性というものを考えてみた場合、Cは常にサーニッチの人々とその近隣地域という限定された範囲にこだわり続けてきた。そしてサーニッチから近隣のユーロカナディアン社会にその作品が知られるようになり、カナダ全土にその名が知られるところまで来た。それに対し、Chはより広範囲な北米大陸北西沿岸先住民の芸術というカテゴリーからコースト・セイリッシュそしてサーニッチと、その技法や作法やテーマを変化させてきた。いわばChは広い範囲からより狭い範囲により深く素材を求めていった結果、それが普遍的な広がりを見せ、アメリカ合衆国にまでその作品が知られるようになってきたのである。彼らの共通することは、より狭い範囲で、より深く自らのルーツとして民族誌的「情報」を求めていった結果、より広範囲で共感を呼ぶ芸術作品を生み出す結果となっていったことである。

また、事例の2人の社会的経済的成功の基盤をなしていたのは民族誌的「情報」という「資源」であった。それは長老たちが守ってきてサーニッチの学校で「伝承」されつつある言語や神話等といった民族誌的「情報」という「資源」である。その「資源」が経済的成功に連動しうる背景には、その「資源」をユーロカナディアンが評価し、利用しようとする状況がある。この状況こそ先住民の経済的自立を支え、様々な民族誌的「情報」を「資源」として捉えることができることの背景をなしているものである。その一例が、ユーロカナディアンが創りだし、カナダ社会に流通しつつある先住民の「深い精神性」というイメージである。しかし、皮肉なことに、そのイメージが生み出された背景にあるのは、ユーロカナディアンが「同化教育」により、現実には先住民の日常から「文化」を切断して「過去」に追いやってしまったというポストコロニアル的状况でもある。

この状況に対して二つの捉えかたが可能である。一つは、先住民が経済的な成功を握る大きな機会を生み出してくれているという捉え方である。また、もう一つは、経済的成功とはいえ結局のところユーロカナディアンに「踊らされて」「利用されて」いるにすぎないという捉えかたである。本稿はどちらの視点も否定するものではない。ただ、ここで強調すべきは、この状況（同化教育が行った「文化」の壊滅状態）から再び「文化」を復興させていくと

いう強靱なエネルギーが存在するということである。

このエネルギーとは、本稿における見解では、指定居留地の外で常に先住民（マイノリティ）に突きつけられるアイデンティティの問いかけに立ち向かおうとする力である。この問いかけとは「『白人』のように見えないこともないが）お前はいったい何者だ？」という形でカナダ社会の日常に埋め込まれ、先住民に対し要求する暗黙の圧力とすることができる。この問いかけはサーニッチの人々に存在に関わる危機感を呼び起こす。そして、この問いかけに対するサーニッチの応答こそ民族誌的「情報」からサーニッチが作り上げようとしているシステムである。

それは、有徴化された人々の自らの生存に対する危機感に基づく応答だと捉えることもできる。その危機感の共有こそがサーニッチの人々を有機的に結びつけ、自らの日常に地域集団としてのつながりを強化し得る新たな可能性を生み出している。それらは長老たちが守ってきた言語や神話、地名や博物館に残された祖先の作品等の民族誌的「情報」を基に様々な形を取りながら、サーニッチの日常にフィードバックさせていく経路を作りつつある。そして、今やその経路は、ブリティッシュ・コロンビア州やカナダのみならず、世界中に向けて発信する広がりを見せようとしているのである。

## 註

<sup>1</sup> カナダ政府に、リザーブ（指定居留地）に居住する先住民を管理する大きな権限を与えた法律。1876年に施行された。このインディアン法は先住民に対し「インディアン」として認められるための諸条件を規定し、先住民に指定居留地の外への移住を規制し、子供に教育を受けさせる期間と場所を限定する権限をカナダ政府が持つことを認めた。そしてこの法律により1960年代まで先住民の参政権が認められなかった。また指定居留地をもたない先住民集団の管理権限も連邦政府に与えた。その後、こうした欠点を除去する修正をいくつか加えられたが、多くの条項は今でも1876年からそのまま有効である。例えば、現在でも連邦政府が選挙を監督し、先住民の法律の許認可権を握り、先住民地域集団と先住民個人に属する資金や資産を管理し、先住民の土地を管理している。また、先住民をユーロカナディアン社会に同化させる政策が行なわれるようになった。いわゆる「公民権賦与（enfranchisement）」がその一例である。連邦結成に先立って、1857年の「漸進文明化法」には、先住民がそれまでの「部族社会」を離れて公民権を要求する場合は資産や給付金を与えるという条項が含まれていた。この法律の公民権賦与とは先住民のそれまでの「未開人」の生活様式や慣習を西洋人的「文明市民」のそれに替えた褒賞なのだという見解である。

2. 当時、サーニッチの母親たちのなかには子供に朝食を食べさせずに学校へ行かせる者がかなりの数になっていた。多くの場合母親がアルコール依存症であるため朝起きることができずに子どもたちだけで学校の準備などを済ませていた。そこでトライバル・スクール設立当時（1980年代の後半から1997年）の校長ホール女史は、毎朝、オレンジジュースとベーコンとトーストの朝食を学校のすべての生徒とともに摂っていた。
3. ここでもユーロカナディアン社会と密接な関係を持った2人の彫刻家が脚光を浴びたという事実がある。一人は、ハイダ出身の母親とスコットランド系の父親の間に生まれたビル・リードである。ビル・リードは、母方の祖父から聞いたハイダの神話をモチーフとして、父親の影響によるユーロカナディアンとしての西洋美術に関する高い教養を自らの彫刻に結晶させた。そして、もう一人は、ヘンリー・ハントである。ヘンリー・ハントはアメリカ文化人類学の父と呼ばれるフランツ・ボアズの調査に協力したことで有名なクワクワカワクウのインフォーマント、ジョージ・ハントの息子である。この2人の芸術家の活躍により先住民の芸術家たちとユーロカナディアンとの経済機構の関係も生まれてきたのである。
4. この場合、Cの作品の発注者はCの作品を「芸術家Cの」作品として受け取っているのか、「サーニッチ芸術家Cの」作品としてか、あるいは「北西沿岸先住民芸術」の作品もしくは「カナダ先住民の」作品として受け取っているのであろうかという問題が発生するが、ここでは、受け止める外部の者にとって、サーニッチという特定の先住民集団と彼らの独自の作風とのつながりは、あまり意味を持っていない可能性がある。Cの個性性が認識されているのは、Cを直接知る近隣の大学や商店ということになる。Cから見れば、「サーニッチの芸術家Cの作品」というあらたな「情報」の背景として確固たる「歴史」が必要であり、Cらしさの厳然たる根拠として「コースト・セイリッシュの『伝統』」が機能しているのである。

## 参考文献

- 渥美一弥「虹を掲げた人々——ニシカ族の教育と神話的世界」『民族学研究』第56巻、第2号、1991年、209-218頁。
- 『「伝統文化」を「名乗る」こと——カナダ・サーニッチ族の神話、地名、人名の今日的意味について』『民族学研究』第61巻、第1号、1996年a、105-125頁。
- 「生き残る知恵——北西海岸先住民のボトラッチ、その今日的意味について」『Arctic Circle』第20号、1996年b、4-7頁。
- 「復興される『過去』——スピリチュアルなイメージを媒介とした先民とユーロカナディアンの関係について」川田順造・上村忠男編『文化の未来——開発と地球化のなかで考える』未来社、1997年、110-119頁。
- 「『文化』を過去形で語ること——カナダ西岸先住民・サーニッチのサケ漁りーフネットに関する『語り』について」『第12回北方民族文化シンポジウム報告——北方における漁撈と文化変容の関係——サケをめぐる文化』北方文化振興協会、1998年、55-70頁。
- 「『情報』としての『民族』——カナダ先住民サーニッチの『文化復興運動』における政治・経済的状況」『第19回北方民族文化シンポジウム報告——北太平洋沿岸の文化——政治経

- 済と先住民社会』北方文化振興協会, 2005年a, 51-56頁。
- 「文化とアイデンティティ——先住民は消滅するのか？」奥野克巳・花潤馨也編『文化人類学のレッスン——フィールドからの出発』学陽書房, 2005年b, 207-233頁。
- Haig-Brown, Celia. *Resistance and Renewal: Surviving the Indian Residential School*. Vancouver, B.C.: Tillacum Library, 1988.
- Jeness, Diamond. *The Indians of Canada*. Ottawa: Information Canada, 1963.
- Manuel, George and Michael Posluns. *The Fourth World: an Indian Reality*. Toronto: Collier-Macmillan, 1974.
- Muckle, Robert James. *The First Nations of British Columbia: An Anthropological Survey*. Vancouver, B.C.: University of British Columbia Press, 1998.
- ロサルド, レナート『文化と真実——社会分析の再構築』椎名美智訳, 日本エディタースクール出版部, 1998年。
- Suttles, Wayne. "Private Knowledge, Morality, and Social Classes among the Coast Salish." *American Anthropologist* 60.3 (1958): 497-507.
- . *Coast Salish Essays*. Vancouver, B.C.: Talon books, 1987.
- . "Central Coast Salish." *Handbook of North American Indians: Northwest Coast*. Vol. 7. Ed. Wayne Suttles. Washington, D.C.: Smithsonian Institution, 1990. 453-75.
- Waldram, James B. "Aboriginal Spirituality in Corrections." *Native Americans, Crime and Justice*. Eds. Marianne O. Nielsen and Robert A. Silverman. Boulder: Westview Press, 1996. 239-51.
- . *The Way of the Pipe: Aboriginal Spirituality and Symbolic Healing in Canadian Prisons*. Ontario: Broadview Press, 1997.

## オンライン資料

カナダ大使館ホームページ

<[http://www.canadanet.or.jp/about/faq\\_nations.shtml](http://www.canadanet.or.jp/about/faq_nations.shtml)> (accessed 26 Mar. 2008)

Brentwood Bay Lodge and Spa

<<http://www.brentwoodbaylodge.com/Page/art/>> (accessed 26 Mar. 2008)

Chris Paul. Com

<<http://www.chrispaul.ca/index4.htm>> (accessed 26 Mar. 2008)